



ココロ コラム vol.3

周りとは違う、は ダメなこと？

広く知られるようになった「発達障害」。

しかし支援や理解はまだ十分でなく、

「生きづらさ」を感じている人も多くいます。

そんな「生きづらさ」を軽減するために、

本人や家族・周囲の人はどんな工夫ができるのでしょうか。

発達障害を持つ子どもを対象に支援を行う

大阪医科薬科大学LDセンターの先生方にお話をお聞きます。

くりもとなおこ
栗本 奈緒子 先生

大阪医科薬科大学LDセンター 言語聴覚士

言語聴覚士として、幼児期・学童期の子どもたちの言語コミュニケーションや学習の評価、指導を担当する。公認心理師、特別支援教育士スーパーバイザー、日本LD学会理事、特別支援教育士資格認定協会理事。



大阪医科薬科大学LDセンター

言葉の遅れや認知の偏りがあるお子さんを対象に、各種検査を実施し、幼児の言語・コミュニケーションと学習姿勢の基礎作りの指導、学童期のお子さんの言葉の指導や学習の基礎となる力を育てる指導、ビジョンセラピー、作業療法などを行っています。



みなさんは、「自閉スペクトラム症(ASD)」ということばを聞いたことはありますか？映画やドラマの中で自閉スペクトラム症を持つ役の人が出てきたり、アーティストとして活動する自閉スペクトラム症の方についての報道を耳にしたりすることが増えてきたため、「自閉スペクトラム症」ということばを聞いたことがある方もいるかもしれません。では、自閉スペクトラム症の子どもには、どのような特徴があるのでしょうか？

「自閉スペクトラム症」とは

かつては、同じような特性であっても知的能力障害の有無や言語能力の違いなどによって、「自閉症」「アスペルガー症候群」「広汎性発達障害」といろいろな言い方がありました。しかし、いずれも同じ特性の連続体(スペクトラム)であるという考えから、最近では自閉スペクトラム症と言います。自閉スペクトラム症には、次のような3つの特徴があります。

1.人との付き合い方

- 場面の雰囲気やルールを読み取り、それに合わせて行動することが苦手
- 付き合い方のルールがわかりにくいので、一人でいることを好むことも多い

2.コミュニケーションの取り方

- 常に丁寧語で話すなど、ことばの使い方が特徴的
- 視線が合いにくい
- 会話がキャッチボールにならない
- 独特のイントネーションで話す

3.行動の特徴

- 興味や活動が限定的で、同じ行動を繰り返すことを好む
- 興味のあることはとても詳しいが、興味が広がりにくい
- 急な予定変更への対応が苦手

このほか、五感(視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚)に代表される感覚の偏りや、眠りの時間が短く浅いなど睡眠の問題を持つ子どももいます。いずれも保護者の育て方に

よって起こるものではなく、本人がもともと持っている特性です。

幼児期の姿

友達や先生とのかかわりよりも物を使って遊ぶことを好み、いつも同じ遊びをする傾向があります。また、集団の活動に参加するよりも、一人で興味のあることをしていることが多いです。集団での遊びや活動に参加しにくいと保護者や先生は不安に感じるかもしれませんが、この時期は同年齢の子どもとの活動に参加させる前に、大人との関係性を築くことが大切です。その子が興味をもっている遊びに寄り添い、同じ遊びをして楽しさを共有すると、一緒に遊んでくれる人への興味が育ちます。

ことばの発達も子どもによって違い、ことばの遅れを伴う場合もあれば、難しいことばを使って流暢に話す子どももいます。自分から話すときは積極的ですが、名前を呼んだり「靴を履いて」と声をかけたりしても聞こえていないかのようにふるまうことがあります。ことばは、理解する力と話す力に差があることが多く、おしゃべりしている子どもでも理解はまだ追いついていないことがあります。そのため、こちらから伝えたいときにはことばをかけるよりも物を見せる方が伝わりやすいです。例えば、「靴を履いて」と声をかけるよりも、その子どもの靴を見せた方が「靴を履く」ということを理解してすぐに行動できます。

ゲームの勝ち負けや、「1番に並ぶ」などへのこだわりが強い場合があります。また、急に予定が変更されたり、行き帰りの道を変えられたりすると、不安でパニックになることもあります。砂や水を触ることを好む、光がきらきらするのを見ることを好む、大勢の人が集まるざわざわした場面で耳をふさぐ、特定の素材の服を着ることを嫌がるなど、感覚の偏りによって好きな感覚・苦手な感覚を持つこともあります。

学童期の姿

友達とのかかわりが出てきます。ことばの力も伸びてきますが、自分の興味があることを

表.感覚の偏りへの対応

感覚の偏り	対応の例
聴覚の過敏	<ul style="list-style-type: none"> ●イヤマフ(ヘッドホン型で、音から耳を守るもの)やノイズキャンセリングイヤホンを使う ●音が大きい・ざわざわした場合は、離れた場所から見学する ●聞き取りやすい位置の座席にする
視覚の過敏	<ul style="list-style-type: none"> ●色付きレンズの入った眼鏡を使う ●日光や電気の明るさを考慮し、見やすい座席にする ●薄い色のついたノートを使う
味覚の過敏	<ul style="list-style-type: none"> ●給食では、メニュー表で食べられないものを確認し、食べられるもの・食べられる量を本人が決めて盛り付ける



一方的に話し続けてしまう、友達から言われると断ったりかわしたりすることが苦手など、コミュニケーションで困ることがあります。また、友達とのかかわりよりも、一人で過ごすことを好む場合もあります。

学習面では、読解や文章題よりも、漢字の読み書きや計算を得意とすることが多いです。苦手な教科への取り組みと、好きな教科への取り組みで大きな差が出る場合があります。幼児期に勝ち負けや「1番に並ぶ」ということにこだわりがあった場合、学校ではテストの点数にこだわりを持つことがあり、100点を取れないと泣いたり怒ったりする子どもがいます。保護者や先生が「100点すごいね」とほめると、さらに「100点はいいこと=100点が取れないのは悪いこと」という価値を強く持ってしまうことがあるため、「問題をよく読んで考えたんだね」「最後まで頑張って解いたね」と点数以外の価値を伝えることが大切です。

感覚の偏りを持つ場合、その影響で参加しにくい活動があるかもしれません。例えば、聴覚の過敏さを持つ場合は、一般的には気にならない大勢の人のざわざわした声や、音楽の笛の練習でそろっていないいろいろな音が聞こえることを苦痛に感じる場合があります。また、視覚の過敏があると適度な明るさの場所や白いノートでもとてもまぶしく感じたり蛍光灯のちらつきを敏感に感じたりします。味覚の過敏では、特定の食感や味をととても不快に感じるため、食べられないものがあります。学校の教室などで聴覚や視覚に不快を感じると、話を聞いたり考え

たりすることも難しくなります。そのため、感覚の偏りには配慮が必要です(表)。学童期になると、ことばの理解が話す力に追いついてきますが、長い文や複雑な指示は耳で聞くよりも文字に書いてあるものを読む方が理解しやすいことが多いです。また、ざわざわと声や音が多い場所では、感覚の偏りがなくても相手のことばをうまく聞き取ることが苦手な場合もありますので、教室では廊下側や後ろの席を避けるほうが、先生のことばを聞き取りやすいです。

心地良い環境を作るために

自閉スペクトラム症は、連続体(スペクトラム)であるために、上記のような特徴を強く持つこともあれば、ほとんど目立たないこともあります。この特徴は、「強く持つ子ども=社会適応が難しい」というわけではありません。その子が学習や生活をする場所の配慮や周囲の人とのかかわり方によって、特徴を強く持つ場合でもうまく適応していることもありますし、逆にほとんど特徴は目立たない子どもでもうまく適応できずにつらい思いをしていることもあります。周囲の人がこの自閉スペクトラム症の特徴を理解し、少し工夫して対応することで、自閉スペクトラム症の子どもも、周囲の人も、お互いに心地良い環境を作ることができるのです。お互いの特性=個性を尊重し歩み寄りながら、より良い社会にしていきたいと思います。